

多摩大学経営情報学部学生会執行部 会長就任挨拶

多摩大学経営情報学部学生会執行部 会長 伊藤 公亮

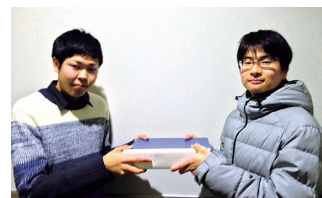
この度、多摩大学経営情報学部学生会執行部2代目会長に就任致しました。

学生会執行部の昨年1年間を振り返りますと、様々な課題が見えて参ります。その中で“本組織の認知度”に関して、もっと多くの方へ、本組織の活動を広めたいという願いがあります。今回、学生ジャーナルへ記事を掲載させてもらえることができ、本組織を一人でも多くの方へ周知できる機会を提供して下さったこと、大変嬉しい限りであります。

さて、本組織は2013年度より発足し、設立2年目と成長段階に位置づけられ、その歴史は皆無であります。しかし、2013年度の活動において、初代会長である木下周さんが尽力され、組織体制の精緻化が成され、今後活動をしやすい環境を整備していただきました。

2014年度、私が会長としての役儀を務めます、2年目という立場は、組織のプロセスにおいて、成長の軌道に伸るか反るかが決まる大変重要

な1年であります。皆様にとって価値のある組織へと成長が出来るよう、構築されたインフラを最大限活用し、学生へと還元することが組織運営をしていく上での努めです。具体的なビジョンとして、サークルなどの学生団体の管理のみならず、学生会主催イベントの多数実施や、湘南キャンパスとの親睦も深めていきたいとも考えています。



前会長 木下さんと

発足から1年、学生会の歴史を刻んでいく上で、その礎となるノートができ上がり、まずは1ページが綴られました。これからは、皆様との歩みをノートに刻むべく、会長として誠意を込めて職務に取り組んで参りますので、皆様のご支援賜りますようお願い申し上げます。

〈石川晴子ゼミ〉学生会協賛・協力 バスケ大会を開催して

石川ゼミ2年代表 市河 遼人

2014年1月10日(金)、石川晴子ゼミ2年はバスケットボール大会を開催した。私たちは運動を通して少しでも学内を活性化させたいという気持ちで、このバスケ大会を開くことにした。場所はもちろんアリーナ。宣伝は直接声掛けを行ったり、学内ディスプレイを利用したりして、毎日学生の目に入るようにしていた。石川ゼミでは前年度もバスケ大会を開催しており、前回のデータや反省が当企画の実施へ向けて私たちの背中を押したということもあるが、宣伝の甲斐あってか参加チーム数は去年を上回る8組。さらに今回は学生会から経済的な支援を頂くことになったため、イベント名は『学生会協賛・協力 石川ゼミ主催バスケ大会』となった。前大会よりも規模は増し、責任も重いものとなった。

しかし、ゼミ内のチームワークはあまり上手くいかなかった。特に役割分担が難しく、明確に誰が何をするかというのを決められず、あやふやなまま月日は過ぎていった。それでも当日に近づくにつれてゼミ生は焦り始め、細々と連絡を取るようになっていった。作業がひとりに偏っていたりもしたが、なんとか形にしていっていった。大会前日に「前日説明会」を開き、ここでトーナメントをくじで決めた。しかし説明会を欠席するチームや、エントリーミスするチームなどが出てしまい、参加者に不安を与える説明会となってしまった。エントリー方法すらあやふやなまま進んでしまったことが原因であった。私たちは大変焦り、当日の動きや必要な物などを再度確認はしたものの、不安なまま当日を迎えた。

大会当日は気を緩めていた訳ではなかったが、試合は10分押してスタートした。また最初の試合はゼッケンの用意を怠ってしまいゼミ生の審判も混乱してしまった。すぐ教育サポート室の方が貸してくださり、非常に助かった。試合時間は一試合8分、間の休憩時間は2分を目安としたがその後はスムーズに進んだ。さらには、腕自慢なチームが集まっているだけあって、ハイレベルなプレイで想像以上の盛り上がりを見せていた。女子学生の参加は2名と残念だったが、私よりも遥かにアグレッシブで驚かされるばかりであった。なかでも圧倒的な強さを見せるチームがあり、熾烈な争いの中あっさり優勝を獲得した。表彰を含めた閉会式も撤収時間に間に合わせ、後味の良い幕引きとなった。

私たちは今回、観戦者への配慮が特に足りなかったように感じた。参加者の友人や、告知を見たと思われる学生などが観戦していたが、大会参加者だけでなく観ていると一緒に楽しめるようなひと工夫があったら、と少し悔いが残った。大会はやや景品メインで、もっと大事なことを忘れていたようにも今は思える。だがバスケ大会参加者には、私たちが主催した場のなかで素晴らしいプレイをして頂き光栄であった。多くの参加者から「楽しかった!」と言ってもらえ、個人的には大会は成功であった。そして、参加チームの勝っても負けても活き活きとした表情を見られたのは、我々のゼミ活動の支えとなるだろう。将来的には、大成功だと胸を張って言えるようなイベントを規模の大小問わず主催してみたいと感じた。



熾烈な攻防戦が絶えなかった



閉会式後の集合写真

おはようから就活まで

私の就職活動は2年の冬頃から始まった。キャリア支援課が招いた外部講師による就活準備特訓塾なるものである。多摩大学の同じ学年の方々と就活の心構えを学んだり、様々なテーマでグループワークを行い代表者が前に出て発表を行うなどした。冬休み中には1泊2日の合宿にも参加した。これら一連の講座の中で、人見知りかつ人前でプレゼンをするといった行為が極度に苦手であった自分の苦手意識が変わり始めた事は、今思い返すと大きな収穫であった。

3年の春頃からはキャリア支援課が行う講座に毎週参加して、自己分析や自己表現などを行い就活に対しての危機感を保ちつつ、ゼミやサークルの運営に主体的に関わり続けた。ゼミとサークルによって人前に立つことや社会人の方々と関わり続ける中で、自分を表現する事に慣れていった。

秋頃からは自己分析と筆記試験対策に集中した。自己分析は書き込み式の参考書をじっくりと、筆記対策は参考書を何周もした。今思うと、これらの対策は夏休み頃までには手をつけておくべきであり私は遅すぎた。

2月に入ると説明会参加やエントリーシート記入などに追われる毎日。そんな折、友人から「この会社の説明会行ったけどおすすめだよ」と紹介された会社をダメ元で受けたのだが、なんと私はこの会社に入ることとなった。

内定を頂いたその会社は筆記試験、グループディスカッション (GD)、1次面接、最終面接の4つの選考だった。まず、筆記試験は運。GDはキャリア講座等で何度も対策していたため余裕があった。1次面接では「3分間自己PR」があったが、自分の長所をこれまでの活動を根拠として自信を持ってプレゼンした。就活を始めてから初めて臨んだ最終面接では想定出来かね

ばどわいざー (バドミントンサークル) 久恒ゼミ 4年 重田 康明

ような質問もあったが、聞かれる可能性が僅かでもあるものを片っ端から列挙してその答えを用意し、質問に答えている自分の姿をiPhoneで動画撮影してチェックする方法で自信を深めていた為、無事切り抜け内定を頂いた。将来性や業務内容、日本トップレベルの福利厚生と離職率の低さなどが決め手となりこの会社を決め、就職活動は2013年3月26日に終了。

今振り返って思うことは、多摩大学に入り、キャリア支援課なくして自分の就活の成功は無かった。面倒くさながら色々と参加して本当に良かった。そして、主に大学内の活動において、ポジティブな姿勢で様々な事に取り組み続けた事も大きかった。

就活を早く終えた事で4月から学業やアルバイトに専念でき、10月にはヨーロッパ1ヶ月1人旅に行って自身の価値観が変わる程の貴重な体験が出来た。

今年4月から社会人となるが、学生生活の中で得た経験を軸に、多摩大卒に恥じないような人物になれるよう自己研鑽に励み続け、感謝の気持ちを忘れずに成長していきたい。



キャリア支援課早河さんと

フットサル部と大学生活

フットサル部 初代キャプテンとしての最後の言葉

フットサル部 4年 堀田 浩平

私が大学に入った時「体育会フットサル部」はありませんでした。小学校からサッカーをやっていた私は将来サッカーの指導者になりたいと思い、大学に通いながら母校のサッカー部に指導者の勉強として毎日のように行っていました。アルバイトでも民間のサッカースクールでコーチをやっていました。それを見ていたサッカー部の監督から横浜FCのスクールコーチの仕事を紹介していただき、そこでも働き始めました。しかし、サッカーを現役のプレイヤーとしてまだやりたいということは、いつも思っていました。アルバイト先の紹介でサッカーの社会人チームに入り、プレイしていましたが月に1度あるかないかの試合をただやるだけ。私には物足りないものでした。なので、現役プレイヤーとしてやりたくてもやれない環境でした。

そんな思いを持っていた大学3年になる頃、多摩大学に体育会フットサル部ができるという話を聞きました。半信半疑で学校に行くと、説明会があるとのこと。とりあえず話を聞いてみよう、説明会を受けに行きました。そこで、チームの目標が「大学日本一」ということを聞き、即入部を決意しました。

説明会に来ている生徒は、皆年下ばかり。同年代を誘っても、「いまさらガチでやりたくない」と言う人ばかり。それもそのはず。大学入ってから2年間、体育会はなかったので大学で授業を受け、バイトして、遊んでの繰り返し。楽しいことしかしてなかったのを、急に「日本一」を目指して毎日のように練習。この切り替えをできるのは、相当ボールを蹴るのが好きでないとできないだろう。しかし私はできた。私はボールを蹴る環境を求めていたし、ボールを蹴ることが大好きだからだ。

入部の前に練習会があったが、やはり皆一年生。しかし、私はそんなことに気にせず積極的に話しかけコミュニケーションをとり、ボールを蹴る事を楽しんでいました。そしてそのまま入部し、キャプテンに任命された。高校の時にもサッカー部のキャプテンをやっていたのであまり重く考えずにやっていました。しかし、高校生と大学生の違いを思い知らされました。高校では書類や試合詳細、会計などは全てコーチがやっていました。だが、大学では全て自分でやる。書類から会計まで全て初めてで、周りに聞くにも多摩大では初めての体育会なので誰もわからない。とにかく自分で考えてやることしかできませんでした。

現在のフットサル部にはマネジメントスタッフがあり、書類や会計などをやってくれているが、初年度は全てチームの代表である私がやっていたので、その大変さは誰よりもわかっていま

す。自分たちがボールを蹴れるのも裏で動いてくれている人がいるから。その人たちにいつも感謝しながらボールを蹴っていました。また、支えてくれている人たちに私たちができる恩返しは、一つでも多く試合に勝つことです。後輩には、このことを忘れないで欲しい。私以外の部員は、大学に入った当初からフットサル部があり、その環境が普通になっている。しかし、これは数多くの人の協力によりできたものであり、継続しているものである。常に、感謝の気持ちを忘れずに大学生活を送って欲しい。

部活をやっているからといって、学業をおろそかにしていいわけではない。就職活動もしっかりやらなければいけない。私は、単位もしっかり取り就職活動もしっかり内定を取って終えた。部活・学業・就職活動。「両立するコツは？」とよく聞かれる。しかし、特にコツなんかはないと思う。なにかやっている時間はそれしかできない。その時間は全力で今やっていることに向かう。ただそれだけ。常に一生懸命にやればいいと思う。また、フットサル部の一員としての責任があれば無意識にしっかりやると思う。

私は就職先でも、サッカー部に入部が決まっている。とことんサッカー馬鹿である。チームの目標は「JFL (日本フットボールリーグ)」。ただここでも仕事とサッカーを両立しなければいけない。しかし大学で経験してきたことが役に立つだろう。大学4年間で経験してきたことを、今後生かしていける内から仕事・サッカーで活躍できたらと思う。

最後にフットサル部そして、私に関わった全ての人に感謝します。ありがとうございました。



引退試合後、共に戦った仲間と一緒に

〈木村知義プロジェクトゼミ〉

メディア実践論の制作現場から

プロジェクトゼミ「メディア実践論」で得たこと

経営情報学部 4年 下村 耕介

大学4年の秋学期、私は初めてこの授業を履修した。後期からこのゼミを履修しようとしたきっかけは、メディアの制作現場に興味を持ったからだ。

初めてプロジェクトゼミ「メディアを創る—メディア実践論」という授業に加わり私が感じたことは、メディアの制作とは小さな作業の積み重ねであるということだ。たった数分、数秒の情報発信の裏側、制作現場は非常に泥臭い。

まず、編集にたどり着くまでが大変だ。やらなければならない地味な作業がとて多く、計画を立ててもスムーズに行くことは滅多にない。小さな作業を積み重ねていく根気がなければメディアは制作できないと言うことがこの授業でよくわかった。

授業で実際制作の現場、制作の手法を学び私が得たものは二つある。一つ目は、情報収集するクセだ。「メディア実践論」では下調べの大切さを思い知った。思いつきではメディア制作はできないからだ。前に述べた通り、メディア制作は小さな作業の積み重ねで出来ている。各段階を一つ一つ踏まなければメディア制作は成り立たない。その初めの一歩が情報を事前に下調べをすることである。下調べ（リサーチ）のやり方、方法を学んだ結果、どんなことにでも万全の準備をして物事に取り組めるようになった。準備不足で失敗したり、恥をかいいたりすることが少なくなった。

二つ目は、どんどん自分から率先して物事に取り組む「挑戦していく意識」が高くなったことだ。この「メディア実践論」はメディア制作の手法を学び、実際に成果物をつくり上げて評価されるまでが授業である。授業は一週間に一度しかないので、90分ではゼミ生の活動の進捗の報告と確認をする程度しかできない。だから、自ら率先して活動していかなければそこから前には進まないし、アドバイスも指導も受けられない。大げさだが、自ら動かなければ何も変わらないのだ。そして行動すれば何かが必ず変わるということを知る良い機会になった。

私は4年生で3月には多摩大学を卒業することになる。4年の秋から履修した「メディア実践論」で過ごした時間はあっという間に過ぎてしまったが、とてもかけがえのないものだった。なぜなら、このゼミを履修したことによって、改めて気づかされることがたくさんあったからだ。今までの学生は事前の準備不足でよく失敗していたが下調べ、事前準備の大切さを、授業を通して実感し間違いが減ってきた。そして、自ら率先して行動することの大切さを再認識できたことだ。主体性を持つということがどういうことなのか、卒業する前に最終確認できて良かった。

プロジェクトゼミ「メディア実践論」が「メディアを創る」ということを掲げている意味がよくわかった。また、それが同時に、ゼミの活動を通して私自身を拓き、創っていくことに通じることも学んだ。私が獲得したことは新社会人としてあらたなフィールドで活躍していくための土台となっていくだろうと信じている。



プロジェクトゼミ「メディア実践論」の教室から

“伝える” にトコトン向きあった 地域プロジェクト発表祭

経営情報学部 3年 渡辺 光

「ボクの名前、翔のように、メディア実践論は来年さらに翔びます！」昨年未開催された「地域プロジェクト発表祭」で、我がプロジェクトゼミ「メディア実践論」のプレゼンターをつとめた吉野翔君は力強くこう締めくくった。現在のゼミメンバーだけでなく以前在籍して映像制作に取り組んだ学生たちも会場に駆けつけ、熱い視線を注いだ。これまで制作した映像作品を活用したプレゼンテーションは、嬉しいことに学内外の参加者の好評を得ることができた。プレゼンテーションの構成、制作を担当した私としてはホッと胸をなでおろした瞬間だった。

「地域プロジェクト発表祭」にむけての準備を教室で言われた時、という切り口で発表すればいいのか思い悩んだ。しかし「大学発、情報発信への挑戦」を掲げて音声・映像作品の企画、制作と取り組む「メディア実践論」の活動を、ここでせき止めてみることは、ビデオジャーナリズムのアクティビストに関心を持って参加することになった自分自身の歩みと問題意識を見つめ直すことにほかならないと思って取り組むことにした。

まず考えたのは、6年間にわたるプロジェクトゼミの活動を、それは木村先生に言わせると試行錯誤と悪戦苦闘の連続ということになるのだがどう見せるかということだった。また昨年から「多摩大学学生ジャーナル」の取材・寄稿という“活字メディア”への参画や、多摩地域の“コミュニティメディア”の調査・研究など、活動のフィールドを広げるチャレンジも重ねてきている。全てを平板に並べただけでは視点が定まらず、何を伝えたかったのかがぼやけてしまう。結局、それぞれが今までに制作した映像のダイジェストをベースに、コミュニティメディアの調査・研究の取り組みを新たに盛り込むことにした。素材が揃って、あとはつくり上げるだけというところにたどりついた。しかし、「過去の活動をつなぐだけでいいの？」と先生から厳しいダメ出し。どうすればいいのか頭を抱えた。その時、毎度々々、教室で言われてきた先生のことがよみがえった。「キミのメッセージは何だ？！」

そうだ、参加者は「思い出話」を聴きにきているわけではないのだ。これまでの活動の意義を明確にし、何を学び、次に何をめざすのか、ここが重要なのだ！ふたたび構成の練り直しへ。映像の要素を再検討し、構成も組み替え、今後の展望を盛り込み、コンセプトをくっきりさせた内容となった。

発表当日、プレゼンターの吉野君と直前までコメント合わせと手直しを行っていたため、一時はどうなることかとヒヤヒヤしたが、先生は横で「サア出来上がるでしょうか？間に合わなかったら画面が白味でザアだネ」などと、まるでテレビの制作現場にいるかのように涼しい顔。編集の細部を整えて、すべてが上ったのは発表15分前だった。発表後の質疑応答でもう一步踏み込めればということももあったが、学部長の講評でも取り上げていただき、発表は大成功となった。

外部の目を意識しての構成はとても大変だったが、「見る側・聴く側」からの視点を常に意識しての制作はとても貴重な経験だった。なるほど番組制作とはこういうことなのかと、「メディア実践論」の真髄というか、作品をつくり上げる難しさと充実感についてかみしめる機会となった。

来年度は私にとって最後の1年となる。私自身どこまで飛躍できるかチャレンジの1年だ。



発表のクライマックス「夢にむけて翔ぶ」

社会人卒、40代（アラフォー）の多摩大生

グローバルスタディーズ学部 1年 本田 尚

ふと思うことがあります。幸福とはなんでしょうか。お金持ちになること。家庭を持ち子供を育て明るい家庭を築くこと。自分のやりたいことを貫き通すこと。おそらくそれぞれが正解だと思います。私は昨年まで社会人をしていました。販売、営業、企画や企業の参画もした経験があります。15名程の部下がいた時期もありました。しかしある時から仕事が空回りし始めました。人生には浮き沈みがあります。思うように、考えているように行動してもうまくいかない時期が誰しもあると思います。そんな時期にさしかかった頃、いろいろな方との出会いがありました。某飲料メーカーの元副社長。某電気メーカーの人事グループの顧問。民主党、元衆議院議員の親戚とは衆院選のお手伝いもさせて頂きました。入学後、なんで今更学生をするの？よくその年齢で大英断をしたね？という質問を頂きます。なぜ学生になったのでしょうか。

私は仕事をするうえで最も大事なことの一つは継続性だと考えます。経済界、スポーツ界、芸能界、いわゆる一般的に成功している方々は、継続の上になりたっている場合が殆どではないでしょうか。たとえば、Apple社のSteve Jobs。New York-Yankeesのイチロー選手など。もちろんその過程で彼らの努力があったのはいうまでもありません。しかしその中でも諸事情により継続できない環境に置かれるケースもあります。その際に重要なのは一歩踏み出す勇気です。人間はある壁にぶちあたると歩みを止めてしまいがちです。それはおそらく未来という見えない環境への恐怖からくるものなのではないのでしょうか。いわずもがな私もその中の一人だったからです。何をすればいいのか、今後自分はようになっていくのか、考えつくことはあらゆることを考えつくしました。“最近、空を見ていますか？”考え事に耽っている時、周りが見えていないのが人の常です。このまま同じところに立ち止まっていたら景色は変わらない。しかしながら安全でありリスクはない。歩みを始めたら、もしかしたら石につまずくかもしれない。ただし景色は変わっていく。さらに景色が変わるということは、いろいろなものをみることが（経験）できるのではないかな。それを人生に置き換えてみましょう。毎日同じ景色を見ながら変化のない、言い換えれば前に進まない人生はおもしろいのか。人生は一度きりなのです。確かに自分はそんな生活を望んでいない。小泉純一郎元首相がとある講演会で仰っていた「百考は一行にしかず」なのです。考えているだけでは何も変わらないのです。一歩踏み出す勇気により人生が変わる可能性がひろがるのです。さらには、考えているその瞬間、その考えている時間事態が既に過去なのです。その考えている時間を未来への行動に移そ

うということ。過去に自分の将来は眠っていないのですから。扉を開き踏み出すのも、扉を開かずじっと留まっているのもあなたの自由なのです。只、私は扉を開くことを選択しました。留まっていることでそこに自分の将来が、未来が見えなかったからです。その為に小さな一歩を新たに歩みはじめたのです。それが学生になるきっかけでした。

私は新たな一歩として扉を開きました。開いた先に見据えるもの、その一つとして留学があります。そして、この夏にイギリスのSheffieldに短期留学を体験することができました。留学は会社の海外転勤とは異なります。企業は海外赴任者に対してできる限りのサポートをします。一方で留学生は己で道を切り開いていかなければなりません。自分を追い込む環境に直面するのです。その環境において留学生が得るものが多々あります。他国の留学生達は非常に積極的であり、その姿勢から自己主張、自己信念を持つことの重要性を改めて認識することになります。さらには文化の違いから考え方の違い、意思疎通の難しさを痛感しました。その根底として普段のコミュニケーション能力が重要であると思ひ知らされました。語学は会話です。いかに人間関係を構築していくかは、普段の素行によるものだと考えます。さらに他国の人々と意思疎通を深める為に最低限、世界共通言語である英語はかせないものだと思ひました。SGSで積極的に学習するとともに、3年次には1年間の長期留学に行くことで語学力を極めていきたいと考えています。

最後に多摩大学 SGS は欧米のスタイルを採用しています。入学後、課題が多く条件を満たさなければ卒業ができません。以前、某プログラムで脳科学者の茂木健一郎氏が、「日本は東京大学に合格した人間は他の大学を合格したとしても東京大学以外には行かない。しかし海外ではハーバード大学やオックスフォード大学に受かったとしても他の大学に行くケースもある。これは偏差値制度のある種の弊害である」とおっしゃっていました。今後の日本の大学のあり方が欧米式にシフトするのであれば、いち早く欧米式システムを導入している大学のひとつであると思ひます。今後の大学のあり方におおいに期待しながら、残りの大学ライフを充実したものになりたいと思ひます。

人との縁を大事に道半ばゆく。

その先に見える物は何か。

踏み出さなければ先はなし。

行こうじゃないかさらなる高みに。



短期夏期留学 UK Sheffield 成田空港帰国にて



多摩大 学園祭にて